

に、佛印政府も取締を嚴にしても、其勢力を除きかねてゐる。彼等は土着民とは同化しないが、併し密接不離の關係を結んでゐる。彼等は一般に愛國心を缺如せるも、出身郷村に對する愛着心は頗る強く、送金其他の關係を通じて支那本土と結ばれてゐることを述べてゐる。そして卷末には索引と參考文獻解題及文獻目録が附されてゐて、豊富なる資料が解説されてゐるのは後學を益する處多大であらう。

今や大東亞共榮圈確立と云ふ、歴史の大事業遂行にあたり、基礎的知識を提供するか、る科學的調査の公刊は誠に時宜を得たものと思はれる。

(東京河出書房、五一頁、定價五四八十錢)(和田俊二)

## 太平洋二六六百年史

### 海軍有終會編

紙幅制限の爲、省略された部分があるにも不拘、千頁を越えるこの書は、我が國を中心とし太平洋を繞る諸國勢力消長の歴史、竝に關係諸地方の現勢を編述し、國民の向ふ所を明示する事を目的として、海軍有終會が海軍軍事普及部の徳惠もあり、海防議會との協力に依り、皇紀二千六百年記念事業として大島良之佐海軍大佐を主務とし、多くの人々を動員し、一年有餘に亙る研鑽の後、世に送つたものである。

前半六百頁餘が、第一、歴史篇として歐洲人來航以前の太平洋及日本の姿から筆を起し、支那事變勃發直前迄の太平洋を舞臺と

して、次第に侵略し來る歐米諸國、それに對抗する皇國の姿を畫き、後半四百頁餘は、第二、現勢篇として太平洋を繞る各地方、島の狀況を、日本(内南洋、新南群島)、支那(海南島、廣東)、及諸泰、米、佛、蘇、蘭、葡の順に列學し、その沿革、自然、政治、軍備、産業、貿易、交通等に分け詳述してある。中米、南米の太平洋岸は紙幅制限の犠牲となつて割愛されて居る。

太平洋をめぐる世界の風運急なるに従つて、この地方を色々の方面から、色々の立場で取上げた著書が澤山出版されて居るが、本書は今迄出版された類書の中で、最も優れたものの一つに挙げられるべきである。それは、決して大作の故ではなくして、その研究があくまで確實に、あくまで學究的になされて居る故であつて、地圖を傍に靜かに本書をひもどく讀者は、淡々たる本書の記述の中に、もゆる血潮の波うつつるを感じるのであらう。皇國を負ふて立つ人々、負ふてたゝんとする人々の精讀を希望して止まない。

六百頁餘に亙つて書かれて居る歴史篇の記述の中の個々の事柄を取上げて尋ねたならば、その中に書かれて居る事項は、ほとんど一度聞いたり讀んだりした事ばかりである。そうした事柄を書いてあるにも拘らず、この篇を讀み出すと、六百頁を讀み終らねばやめられないのは、この歴史篇の記述が、太平洋におきた種々の事實を、單に個々の事實として、もれなく集積する事に主力をそ、がないで、東洋におしよせてくる一つの大きな流を見出し、その流れの現象として、個々の事實を密接に關聯せしめようとした、その努力に依つて居るのではあるまいか。そしてその事が新

らしい世界觀に立脚して、新しい世界の建設に進む私達の心に強い共鳴を與へて、この一篇を讀破させねばおかないのではあるまいか。「歐米列國の日本進出」(第四章第二節)の一節は國史から不愉快な事實をすべて消し去つてしまはうと思つて居る人々からは非難されるであらうが、事實に忠實に書かれた此の章から、他の東洋民族の停滞性、獨善性とは本質的に異つた日本民族の優秀性、その性格の裡に、光輝ある國史が形成されて行つた事をしみじみと感じ、あの幕末の重大時局に當つて、皇國を守られた時代の先覺者達に對し、感謝の念一層深きものがあるのは私一人ではあるまい。

然し、不遜な妄評をした弱輩の私に、更に一つの不遜が許されるならば、現勢篇は、「世界地理」を始めとして相次いで所謂「地誌」類が續々と發表されて居る時なので、それ等と重複する様な形式をとるよりは、海軍有終會のもつ有力な力を以つてして、その道の専門家、大家をわずらはし、その豊富なる専門的知識を活用し、太平洋の現實の姿の上に打建てられるべき所の、太平洋のあるべき姿への具體的な研究の一端を發表して頂きたかつた。よしその事が私見にとゞまり、専門事項に關する限りの事であつても、必ずや更に深い研究への刺激となつた事であらう。そして尙迷夢からさめきらない地理學に「無言の威壓」を加へて頂く事が出来たであらうと信じるのである。

私のこの不遜な一文が、私自身の無智淺學を攻撃される手段となる事は少しも差支へないが、本書の價値を傷けるやうな事がな

いやうにと祈つて居る。(菊判一、一八六頁、地圖十葉、挿入寫眞十八葉、發賣所丸善株式會社、定價十一圓)(川上喜代四)

### 日本考古學論攷

梅原末治著

本書は先きに世に出た『支那考古學論攷』と姉妹編をなすものであつて、著者梅原博士の日本考古學に關する論攷中主要なるもの廿二編に對し、字句の修正の外、新たに補記追記等を加へて一冊に纏めたものである。而して例言に見る如く、最後の二編を除いた外は著者が廿餘年の永きに互る故濱田博士指導下になされたものであり、本書が世に出た意味を右の恩師に對する著者の感謝の言葉の中に味ふことが出来る。

さて右の廿二編の論攷は之を對象の上から大別すると、金石文に關するもの、我が金石併用期の特種遺物たる銅鐸、銅劍、銅鉞等の諸考察、上代古墳に關するもの三部になるが、なほ他に「上代土器に關する一考察」「國分寺に關聯する二二の所見等特種な問題に對する著者の實物に即した見解を録した諸編をも含んでゐる。

先づ金石文に關するものは、『行基舍利瓶記に見えたるその姓氏と享年に就いて』、『小野毛人墳墓とその墓誌』、『山城に於ける宇治宿禰とその墓誌』等の諸編であつて、其の企圖に係る『墓誌を藏した古墓の研究』の一部を成して居り大正四年から六年に互る著者の若き日の述作である。最初墓誌の文獻的考證に興味を持た